尖鋭現代詩選

新しい詩人たちによる 新しい詩の実験と収穫

アポロ詩書刊行会編

解説・禿 慶子

勁草出版サービスセンター

尖鋭現代詩選

新しい詩人たちはまた新しい詩の実験と収穫

解説・禿 慶子

アポロ詩書刊行会編

勁草出版サービスセンター

尖鋭現代詩選
新しい詩人たちによる　新しい詩の実験と収穫

1990年9月20日　第1刷発行

©編　者　アポロ詩書刊行会
発行者　増　田　瓢　雄
発行所　株式会社　勁草出版サービスセンター
〒150東京都渋谷区道玄坂2—16—3　電話03(476)5464
発売所　株式会社　勁　草　書　房
〒112東京都文京区後楽2—23—15　電話 03(814)6861
振替・東京5—175253

＊乱丁本・落丁本は取り替え致します。　　根田印刷・和田製本
＊定価はカバーに表示してあります。　　Printed in Japan.
＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

ISBN4-326-93190-6

序――刊行のことば――

ここに登場する詩人たちは、なかにはすでに文学賞のたぐいを受けている詩人もあるが、それらの人たちを含めてすべてが無名同然の存在である。しかしその作品は、鋭く新しく、実に端倪すべからざるものを具えている。既成の完成された現代詩ではなく、まったく新しい現代詩の領域を切り開こうとする執念がどの作品にも充溢している。この選集を『尖鋭現代詩選』と名づけ、それに〈新しい詩人たちによる　新しい詩の実験と収穫〉という副題を付したゆえんである。現代詩の前衛性を保証し、言語空間の可能性がさらに追究されつづけるよう、諸氏のエスプリの健在を祈る。

難解の誹りを恐れぬ作品ばかりだから、禿慶子氏をわずらわせた解説を巻奥に配した。難解かもしれないが、咀めばかむほどに味の出る作品群であると、自信をもっておすすめできる。

ご高覧を得た読者諸賢の日常に、何らかのインパクトが加えられるなら

ば、編者にとってそれ以上の喜びはない。

なお、本書の制作・刊行・発売にあたっては、勁草出版サービスセンターの増田瓢雄・三好正隆の両氏や勁草書房の関係各位にも温情こもるご尽力をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

一九九〇年　立夏の頃

アポロ詩書刊行会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

柴田千秋
青い獣たち 9
ルナ 12
迷宮 14
弓田弓子
みみず 17
医院の前 18
指紋 19
福原恒雄
卵 21
たずねること 23
雪中返信 25
河津聖恵
フィラメント星 29
巨茎 32
昼と夜 35

岡田　茂
十一月の壺と沖のかなたから　38
舟、そして二十四の鎮魂　47
巴旦杏のある十二の風景　58
雨矢ふみえ
速報・1　ポワン（point）区にて　63
都市は渚　64
われら少女漂流民　70
若林克典
秋風　73
珈琲　75
顔がある　77
坂口朝子
闇色に行き暮れて　83
わかれ病　86
陸橋から　89

清水あみ子
鎖の方向 91
挽歌 92
如月 93
小川勢津子
とりあえずの朝 94
人質 96
出産記 97
渋田耕一
作品B 105
作品C 108
作品A 111
解説 禿 慶子 113
あとがきにかえて 133
収録作品掲載誌書一覧 134

尖鋭現代詩選

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

柴田千秋

ラ・メール新人賞
現代詩ラ・メールの会所属
既刊詩集　「川岸まで」「濾過器」など

青い獣たち

生まれたばかりの青い獣が
ひらいたばかりの目で
透きとおる　自分の手を見ている

彼の中に青い獣が見える
私はふれるまえに傷ついてしまう
母の血が目覚めてしまう

獣はおびえながら笑っている
私は指の中に爪を隠してそっと獣を抱きしめる
彼の中で膝を抱えて眠っている獣の心臓が
トクトクと脈打っている

こうして抱きあっているしかないのかもしれない

彼は目を閉じる
かたい私の胸に触りながら
静脈の浮いた豊かな乳房を思い出している
私は少しずつ血を逆流させながら
にぎった爪をひらいてゆく
ミルク臭い彼の手が
私の獣をさぐり当てる
やわらかな私の寝台で

彼の獣が目を覚ます

こうして交ってしまうしかないのかもしれない

私たちは青ざめながら抱きあって
母の胎から剝がれ落ちていった

放課後の実験室で
下校のチャイムを聞きながら
私はガラス板の上に
彼の精子と私の血を乗せて
私たちの獣を　顕微鏡にかけて見た

ルナ

たった一度だけ　ほんとうの月の姿を見てしまったことがある　晴れているのに星のない夜だった　おだやかな海の上に満月が浮かんでいた　月は孵卵器の中の卵のように少し赤みをおびて　血液が流れているように見えた　私は満ちてゆく潮をからだの中に感じながら月を見ていた　かすかに月の動く気配がした　その一瞬　月は何百もの顔を波間に落としていた

波の面の一つ一つに月が映っていた　私のからだから血の気がひいてゆくのがわかった　見てはいけないものを私は見てしまっていた　月だと思いこんでいたのは私の顔だった　私の知らない何百もの私の顔　からだの中に月を抱えもったまま　私は走り出していた　ふ

りかえると海の上に　月はたった一つだけ浮かんでいた

*

時々鏡の中に知らない私の顔を見ることがある　潮が満ちる時　潮が引いてゆく時　あたためられた卵がひかりながら波間に浮かぶ
月が満ちる時　月が欠けてゆく時　私の顔の上に別の顔が影を落とす　私は影に見えかくれして　三日月になったり　半月になったり
満ち欠けをくりかえす

月の熟れた夜に　孵卵器の中の卵がかえる　砂浜に生み落とされた海亀の卵がかえる　月の熟れた夜に　眠っていた無数の顔が　鏡の中にかえってくる

迷宮

唇の上に唇が重ねられていることに気づいて目が覚めた　その唇がだれのものだかわかっていたので怖くて目は開けなかった　気づいていることを気づかれてはいけない　そのひとも私も　壊れてしまう

そのひとは草食動物が草を食むように　私の唇を食んでいる　糸のように細い雨が動物のからだを黒く濡らしてゆく　私は目を開けそうになる　濡れた髪に手を差し入れそうになる　遠い草原でそのひとはうつむいたまま　永い間　私の唇に触れることを夢見ていた

そのひとと二人きりで一つの部屋にいるのがとても気づまりだった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com